

思い堀 II

主として管理運営について

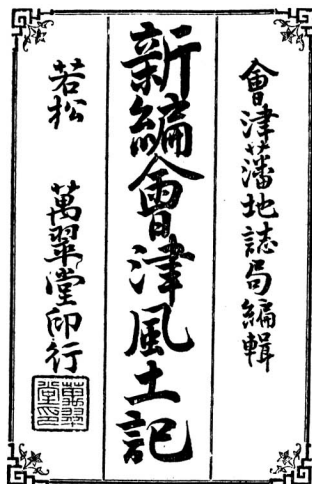
思い堀（岩崎堰）は、文化六年（一八〇九）編集の「新編会津風土記」によれば次のように記され、次の頁に示すとおりである。

まず、本郷村の岩崎山北麓で鶴沼川（現在の大川）から引かれ、田地の養水として本郷村を通り、上米塚村を始め、下小松村、両堂村、柏原村、下米塚村、中荒井村、下荒井村、中里村を経由していた。さらに真渡村の村西にて二派となり、一派は、端村鈴淵の東を過ぎ河沼郡牛沢組上茅津村の方に注ぎ、牛沢組坂下組諸村の養水となった。もう一派は、鈴淵の西を過ぎ富川村に入った。また、富川堰は村の東北に流れる鶴沼川（現在の大川）から引かれ、塚原村の方に注いでいた。さらに樋は、鈴淵の北で思い堀に架していたが、縦横十字のようであり、よって十字樋と名づけられた。上樋は、長さ六間幅四尺鈴淵の東を流れるものを受けて上茅津村の方に注ぎ、下樋は、長さ八間幅一間鈴淵の西を流れるものを受けて富川堰に入っていた。と記してある。

また、この時代より一五〇年ほど前の寛文五年（一六六五）の中荒井組土地帳の「書上げ帳写し」によれば、中荒井村の堰については、次のように記されている。「小侯川は村の東五十四間に有、幅七間、源は村の東南十里上、向羽黒山の麓大川より出る。名づけて思い堀と云う。西北へ流れて宗印町村、上米塚新田、小松村、二堂村、柏原村を経て下米塚村に至って同郡荒川堰と合うに水合して北へ流れて、中荒井村に至って小侯川と云う。又西北に流れて中里村を経て鈴淵村に至って瀧川と云

う。是より西へ流れて上海津村に至って渋川と名づく、又西北に流れて中海津村を経て福原新田村下にて鶴沼川に入る。向羽黒山の水口より村数二十五箇村、高八千八百石余の民家並田の用水となる。此堰は毎年三・四月に至って石土手五十間或は六十間に普請す」
なお以上の地名については原文のままである。

小森 五良



以上のように、この堰は非常に長大なものであり、橋爪組、中荒井組、坂下組、牛沢組の四組二十八か村の田圃などの灌漑用水や生活用水として非常に重要な水路であった。それだけに、その維持管理には非常に困難な点が多かった。